

実践報告

特別支援学校における音楽教育の取り組み

——情報機器を活用した自己表現力を高める教育方法——

Activities of Music Education in a Special Needs School :
Educational Methods for Cultivating an Ability of
Self-Expression with Information Devices

沼田 潤^{*1}・義則 華子^{*2}

キーワード 特別支援学校、音楽教育、自己表現力の育成、情報機器の活用

(1) はじめに

2007年に改正学校教育法が施行され、特別支援教育が導入された際に、文部科学省から「特別支援教育の推進について」という通知が出された。この通知において、特別支援教育は「障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行う」ということが述べられている。さらに、特別支援教育は「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる」ことが指摘されている。

そして、2012年に中央教育審議会から「共

生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」という報告が発表された。この報告において「特別支援教育の推進について」において述べられた共生社会のより具体的な在り方が示されている。その共生社会とは、「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会」「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」であり、そのような社会を形成していくために「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」であるインクルーシブ教育システムが重要であることが示されている。そして、そのイン

^{*1} 相愛大学

^{*2} 大阪府立支援学校

クルーシブ教育システムを構築していくために、障害のある児童生徒の社会参加の促進を目指す特別支援教育を進めていくことの必要性が強調されている。

さらに、2010年に発表された「教育の情報化に関する手引」において、「障害の状態や発達の段階等、児童生徒の実態に応じて活用することにより、学習上の困難を克服させ、指導の効果を高めることができる」と述べられており、特別支援教育において情報機器を活用することの重要性が指摘されている。

次に、特別支援教育において育まれるべき能力に目を向けてみたい。特別支援教育で学ぶ生徒が自己表現できるようになることは重要であると考えられる。多くの生徒が卒業後に社会に出ると、選択をすること、助けを求めること、挨拶をすること、など自らを表現する機会が多い。社会で自らの考えや思いを表現できるようになるために、自己表現力を身に付ける必要がある。

本稿の著者の一人である義則華子は、知的障害のある生徒が通う特別支援学校高等部で自己表現力を高めるための音楽教育に取り組んでいる。同校には、地域の中学校や特別支援学校中学部からも生徒が進学し、発達障害を有する生徒も在籍する。特別支援学校で音楽の授業を担当する中で、例えば、発語のない生徒に対して、演奏したい楽器を自ら選択する機会を多くもつようにしたり、ある状況においてどのように体を動かせば良いのかという認識を高めて体で示すことができる表現を増やしたり、支援者や友人との関わりを楽しいものであると感じられるように工夫したりすることを意識してい

る。また、音楽が苦手で、自分を表現することに抵抗のある生徒に対しては、「自分とは何か」「生きるとは」といった歌詞が含まれる歌を歌い、歌詞の説明の中で自己理解を深めさせながら自己肯定感を高めたり、教員と協力して生徒自ら曲を作ったりする活動を通して、表現することの楽しさを感じることができるよう授業を展開している。さらに、発音の仕方が分かりにくい生徒に対して、歌唱指導の中で発音指導を行い、それまで自分をあまり表現せずきた生徒が、話すことの楽しさを感じてもらえるような取り組みを行っている。

このように、義則が行う特別支援学校における音楽教育の実践では、単に歌が上手に歌えるようになる、楽器が上手に演奏できるようになるということだけでなく、自己表現力を向上させることが目指されており、音楽教育という観点から、障害のある生徒の社会参加を促進する取り組みを行っている。そのような取り組みの中で、生徒が自己表現力を高めることができるより良い学習環境をつくるために、情報機器を活用している。

「教育の情報化に関する手引」に示されているように、行政文書においては、特別支援学校の実践の中で情報機器の活用が重視されている一方で、その実践に関する報告¹⁾の蓄積は十分であるとは言えず、特に音楽教育に関する実践となると、さらにその数は多くはない。本稿においては、このような状況において、特別支援学校で情報機器を活用しながら、知的障害や発達障害のある生徒の自己表現力を高め、より良い学習環境をつくろうと試行錯誤しながら取り組んでいる試みの実例として、義則の実践につ

1) タブレットの学習アプリケーションを利用した実践報告(岩下, 2015; 佐原, 2013; 城間・城間・緒方, 2014)や日常生活の支援ツールとしての情報機器活用報告(荻田・脇谷, 2010; 坂井・宮崎・二宮・門目, 2012)などが挙げられる。

いて報告したい。

(2) 自己表現力の育成を目指した 音楽教育の実践

①歌唱指導におけるプレゼンテーションソフト を用いた歌詞カードの活用

文字を理解することが難しい生徒に対する歌唱指導の際に、プレゼンテーションソフトを用いた歌詞カードをモニター画面に映し出すという取り組みを行っている。従来の模造紙を使用した歌詞カードは、楽曲の流れを一目で確認できるというメリットがある反面、文字を理解することが難しい生徒にとっては、多くの歌詞の中から現在歌っている箇所を探し出すことが難しく、集中力を保ちにくいというデメリットがある。その一方で、プレゼンテーションソフトを使用すると、1スライドにつき2、3行程度のふりがなをふった歌詞を表示することができ、どこを歌っているのか容易に理解させることができる。

プレゼンテーションソフトのもう一つのメリットとして挙げられるのは、歌詞のイメージを視覚的に表示できることである。文字を読むこと、文字を読みながらリズムをとったり、音程を正確に歌ったりすること、また、文字は読めるが、それが何を指しているのかの理解が難しい生徒がいるため、「青い空の下」という歌詞が含まれるスライドには青い空の写真、「手を取り合う」という歌詞が含まれるスライドには手をつなぐ人のイラスト、クリスマスソングの歌詞を示すスライドにはサンタクロースの絵を入れることで、その歌がどのようなことを表しているのかを生徒自身が理解し、イメージする力を補うように工夫している。

このように視覚イメージ情報を提示した結

果、文字を理解することが難しい生徒にとっても分かりやすい授業作りができ、結果として積極的に歌唱に取り組む生徒が増えてきた。プレゼンテーションソフトを活用することで、自己表現することが困難な生徒も歌いやすい環境を作ることができている。

特別支援学校の音楽の授業に関しては、教材・教具に視覚イメージ情報を多く取り入れることで、生徒が集中して積極的に取り組むことができる学習環境の設定に成功した実践（新井・藤原，2015；尾崎，2012）が報告されている。このように学習環境の調整を通して、生徒にとって学びやすい環境を設定していくことは、障害のある生徒を支援していく上でも意義があるとされている（坂上・山口，2014）。義則が行っているこの実践も視覚イメージ情報を取り入れることで、文字の理解に困難がある生徒にとって分かりやすく、参加しやすい学習環境の調整に貢献していると考えられる。

②鑑賞における情報機器の活用

発音が曖昧で言葉の理解が難しかったり、体の動かし方がぎこちなかったりする生徒に対して、歌唱の際に、歌詞に合わせた簡単な動きをつけながら歌う取り組みや、また器楽において、ひとりひとりが責任を持って自分のパートを演奏し、全員が一体感を感じることを目標とした取り組みにおいて、周りの音を聴きながら歌唱・演奏することが困難であることが明らかになったため、客観的に自らの歌唱・演奏を捉えることを目的に、合唱の取り組みの最後、及び、合奏の取り組みの最後に、タブレット機器を使用して撮影し、鑑賞するという活動を行った。撮影することで適度な緊張感を持って臨むことができ、自らの歌唱と演奏を鑑賞することで、生徒から「こんなふうになっていたんだ」

「ここは失敗してしまったけれど、ここはうまく演奏できた」といった感想を聞くことができた。この取り組みを続けることで、だんだんできるようになるまでの変化を生徒たちが自覚することができ、生徒たちの自信にもつながっていった。

また、学年全体で共有したスローガン「やるぞ～！元気、笑顔、団結、オー！！」に基づき、文字の理解が困難な生徒に対して、歌詞を創作する活動を行った際には、その歌詞に教師が曲をつけ、ギター、ドラム、ベース、ピアノなどで伴奏をタブレット機器を使って録音し、それに生徒の歌声を録音し、パソコンで編集したものを校内放送で流す取り組みを行った。自己表現することに抵抗のある生徒も、いよいよ校内放送で自分たちの音楽が流れる日にはたいへん嬉しそうにしており、それを教師や友達から肯定的に評価されることで、達成感をもつことができていたようであった。

佐藤（2009）は、自らの考えや意見を表現する上で、自尊心²⁾がベースになると指摘している。その自尊心は、成功経験や他者からの承認・受容を通してもたらされる自己肯定感によって高まると考えられている（Coopersmith, 1967）。発達障害や知的障害のある生徒は、失敗経験が多く、まわりの他者から叱責や非難を受けることで、自尊心が低下し、他者とのコミュニケーションを避けるようになる二次障害が引き起こされることがあるという（坂上・山口, 2014；梅谷, 2004）。

自尊心の低下を予防し、他者に自らを表現するように促すために、他者からの承認や成功経験による達成感を通して、自己肯定感を高めていくことが肝要になってくる。義則の試みは、

情報機器を用いて生徒自身の歌唱と演奏を鑑賞したり発表したりする機会を設けることで、まわりの他者から認められ、達成感をもつという成功経験の機会を与えようとするものである。情報機器を活用することで、成功経験の機会を与える学習環境の調整が容易になり、生徒の自己肯定感を高める上でも、情報機器の活用は有効なのではないかと考えられる。

③身体表現活動における映像教材の活用

教師の体の動きを模倣するとき、どのように体を動かしてよいのかわからなかったり、ボールをキャッチするのに体の動作がついていかず、うまく取れなかったり、体の幅を感じる感覚が難しく、あちこちにぶつかったりするなど、ある状況でどのように体を動かせばよいのかが分からない生徒が、特別支援学校には多くいる。そのような生徒に対しては、自分の体に対する認識を高めるため、音楽に合わせて体を動かす活動を行っている。その際に、自分の動かしやすい体の部位を使ってオリジナルなダンスをする生徒や、模倣が難しい生徒がいるため、できる限りマンツーマンで支援しながら、課題に取り組むようにしている。

しかし、教員数には限りがあるため、映像教材のあるダンスを選択し、マンツーマンで指導できる教員を確保できるように努めている。生徒は映像教材に興味を持ち、集中して課題に取り組むことができ、教員がマンツーマンで手厚く指導することができる。このように課題の種類によって、映像教材を活用することで、視覚イメージ情報を提示し、生徒の集中力や理解を高めたり、教員数の少なさをカバーしながら授業を展開していくことが可能となる。

2) 遠藤（1999）は、自尊心を自分自身を基本的に価値あるものとする評価感情であると定義している。

映像教材を用いることで、視覚イメージ情報をより多く提示することができ、生徒にとっては集中して取り組みやすく、教員にとってもより丁寧に生徒を指導できる学習環境の調整に成功していると考えられる。映像教材は様々な学習場面で用いられているが、工夫された映像教材の活用は、生徒にとってより分かりやすく参加しやすい、また教員にとって指導しやすい学習環境の調整に貢献すると言えよう。

④授業の導入としてのビジョン・トレーニング

生徒の中には、視力には問題はないが、目の動きが弱く、ボール運動や視写、状況把握に困難さを感じる生徒がいる。このような生徒に対して、両手を上下左右に動かし、それを目で追うなどのビジョン・トレーニングを行うことが目の動きに関する困難さの克服に効果的とされている。このトレーニングを授業に取り入れるため、視覚探索の教材をプレゼンテーションソフトで作成した。画面の端から端を移動する球体や、画面のどこにも出てくる分からない星マーク、画面上にランダムに配置された1から30の数字を目で追う課題を楽しみながら取り組めるように計画した。

なぜ音楽の授業でビジョン・トレーニングを行うのかというと、目の動きからくる困難さに起因した失敗体験の積み重ねの結果、音楽を通して自己表現することに対して消極的になる生徒がいるためである。前述したように、特別支援教育における音楽の授業で重要なことは自己表現力を高めることである。音楽の授業で一般的に行われている、歌唱、器楽、鑑賞、身体表現に加えて、情報機器を活用したビジョン・トレーニングを取り入れることで、表現するために必要な力を養っている。

このビジョン・トレーニングの実践は、目の

動きからくる困難さに起因した失敗体験によってもたらされる自尊心低下の改善を目的としたものである。情報機器を用いて、ビジョン・トレーニングの教材を遊びの要素を取り入れて作成することで、楽しみながらトレーニングに取り組みせることが可能となる。情報機器を用いることで、学校だけでなく家庭においても繰り返しビジョン・トレーニングを行うことが容易となるなど、そのトレーニングが様々な場面で可能となることが期待される。

(3) 今後の展望

特別支援教育においては、情報機器を活用しながら学びやすい学習環境を整え、障害のある児童生徒の社会参加を促す教育が求められているが、本稿で報告した義則の実践は、そのような要請に応えるための試みである。本稿は、知的障害のある生徒が通う特別支援学校高等部の音楽の授業における実践内容についての報告であり、その実践を通して生徒の中にどのような成長がみられたのかを、具体的に述べることはできていない。このような実践を通じた生徒の成長に関するデータを、長期間にわたる詳細な実践記録に基づいて取り続けることによって、実践を検証し、障害のある児童生徒の社会参加を促す上で肝要な自己表現力を高める教育方法を探っていくことが、今後の課題である。

引用文献

- 新井栞・藤原志帆 (2015) 小学校における授業のユニバーサルデザイン化—音楽鑑賞授業に焦点をあてて—, 学校音楽教育研究, 19, pp.146-147.
- Coopersmith, S. (1967) *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: W. H. Freeman.
- 遠藤由美 (1999) 自尊感情. 中島義明他編, 心理学辞典, 有斐閣, pp.343-344.

- 岩下幸広（2015）小学校特別支援学級における ICT の活用，日本教育情報学会年会論文集，**31**, pp.20-23.
- 荻田知則・脇谷咲（2010）声発話のない自閉症児への五十音キーボード式コミュニケーションエイドのフィッティングとコミュニケーション指導，日本教育情報学会年会論文集，**26**, pp.254-257.
- 文部科学省（2007）特別支援教育の推進について（通知）
- 文部科学省（2010）教育の情報化に関する手引
- 文部科学省（2012）共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）
- 尾崎祐司（2012）鑑賞の授業における内部世界のアウトプット支援-「表情カード」をととした発達障害のある児童生徒へのアプローチ-，学校音楽教育研究，**16**, pp.213-214.
- 佐原恒一郎（2013）重度知的障害児におけるタブレット端末利用の効果と課題，教育情報研究，**29**(2), pp.29-38.
- 坂上裕子・山口智子（2014）発達は十人十色，問いからはじめる発達心理学-生涯にわたる育ちの科学，pp.190-209.
- 坂井聡・宮崎英一・二宮綾子・門目紀子（2012）自閉症と知的障害のある児童への携帯電話を利用した買い物指導，日本教育工学会論文誌，**36**, pp.13-16.
- 佐藤淑子（2009）日本の子どもと自尊心-自己主張をどう育むか，中央公論新社.
- 城間江里子・城間園子・緒方茂樹（2014）特別支援学級における iPad を活用した実践事例，琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要，**6**, pp.19-26.
- 梅谷忠勇（2004）知的障害児の認知と学習-特性理解と援助-，田研出版.